

田山花袋『東京の三十年』における 明治の東京

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 明治初期の東京
 - (1) 東京の街 (2) 伯母のたたずまい (3) 兄への想い
- 3 明治の東京一都心と山の手, 近郊
 - (1) 市街の状況 (2) 山の手風景 (3) 東京の西郊
- 4 庶民の生活
- 5 明治の時代状況
 - (1) 学校と上野図書館 (2) 憲法発布の日
 - (3) 日清・日露戦争 (4) 明治天皇の逝去
- 6 おわりに

1 はじめに

本稿は田山花袋の『東京の三十年』における東京の描写の検討を行ない、これを通じて明治の東京の特質を見ていきたい。

「その時分は、東京は泥濘の都会、土蔵造の家並の都会、参議の箱馬車の都会、橋の袂に露店の出る都会であつた。考へて見ても夢のやうな気がする」で始まるこの『東京の三十年』は、「自伝的要素を中心とした明治・大正の文壇回想録⁽¹⁾」である。そこには1881（明治14）年に9歳の時に東京京橋の

(1) 『日本文芸鑑賞事典 第6巻』1987年 ぎょうせい 529ページ。

書店・有隣堂の丁稚小僧として上京、翌年秋帰郷の後、1886（明治19）年に再び上京してからの30年間の作家となっていく道程、文人との交遊が記されているものであるが、生活の場としての東京の街の様子、風俗、その移り変りを随所に描写したのもでもある。

この『東京の三十年』は、木村礎氏が明治中期以降の東京の様子を活写している部分がある、とその史料的重要性を指摘されているが、⁽²⁾『東京の三十年』岩波文庫版の「解説」において、竹盛天雄氏は「終りに一言して置かねばならぬのは、生活の場としての東京の風俗や街の様子、気分などが印象的に浮彫りにされている点である。それを追う花袋の視線は、下町から山手へ、さらには新たに開けゆく郊外にまで及んでいる。生きものとしての都市の発展、変遷がそうさせるわけである。『東京の三十年』の意味は、このような面においても見なおされるにちがいない」、と記されている。⁽³⁾そして、この作品については、すでに前田愛氏によって考察され、⁽⁴⁾杉浦芳夫氏によってもとりあげられている。⁽⁵⁾私も『抒情詩—その時代性—』における考察において部分的に使用したことがある。⁽⁶⁾ここで改めて検討を行ないたい。

以下の本書の検討は、『田山花袋全集 第15巻』（1974年 文泉堂書店）に収録されたものによる。引用ページはこの書のそれを示す。

-
- (2) 木村礎「国生村—長塚節『土』の世界—」木村礎編著『村落生活の史的研究』1993年 八木書店、なお『木村礎著作集 第八巻 村の世界・村の生活』1996年 名著出版。
- (3) 竹盛天雄「解説」『東京の三十年』1981年 岩波書店 333ページ。
- (4) 前田愛『幻影の街 文学の都市を歩く』1985年 小学館、『前田愛著作集 第五巻』に抄録。
- (5) 杉浦芳夫『文学のなかの都市空間』1992年 古今書院。
- (6) 拙稿『抒情詩—その時代性—』『岡山大学経済学会雑誌』第26巻第2号 1994年。

2 明治初期の東京

(1) 東京の街

本書の冒頭の「その時分」「川ぞいの家」「読書の声」は、1881（明治14）年・82年の足かけ2年間の東京京橋の書店 有隣堂の丁稚小僧の時代を振り返った部分である。

書店の丁稚小僧の録弥=年少の頃の花袋の奉公した店は京橋の大通の角にあった。主として農業の書を扱っていた。「京橋と日本橋を渡らなかつた日はなかつた」（447ページ）、というように毎日得意先廻りなどをした。

私の小さな小僧姿を私は東京の到るところの町々に発見した。最初は年上の中小僧に伴れられて、或は車を曳いたり、或は本を山のやうに負つたりして、取引先やお得意の家を廻つて歩いた。ある冬の日、途中から俄にぼた雪になつた。雪に艱まされて、背中には沢山な重い本、下駄にはごろごろと柔かい雪がたまって、こけつ転びつして、漸く一緒に行つた番頭に扶けられて車で帰つてきた。私はまだ満九歳十ヶ月になつたばかりの幼い子供であつた。（449～450ページ）

私の使ひに行くところで、一番遠いところが二箇所あつた。一つは高輪の柳沢伯邸、もう一つは駒場の農学校であつた。其処に使にやらされる時には、小さい私はことにうんざりした。表面は元気よく飛び出して行くけれども、その道の遠いのはいつもへこたれた。殊に、高輪と青山の丁目の長いのが閉口した。何丁目、何丁目と書いてあるのを見い見い歩いて行くのであるが、それが八丁目、九丁目、十丁目と続いた。駒場の農学校は殊に遠かつた。

しかし、宮坂を下りると、あたりが何処となく田舎々々して来て、藁葺の家があつたり、小川があつたり、橋があつたり、水車がそこにめぐつてゐたりした。私はそこを歩くと、故郷にでも帰つて行つたやうな気がして、何となく母親や祖父のいる田舎の藁葺が思い出された。小さい私は涙などを拭き拭き歩いた。

(452~459ページ)

このように、京橋に住み込み東京の街中を、そして郊外を歩いたが、これによって多くのことを見た。

その時分は、東京は泥濘の都会、土蔵造の家並の都会、参議の箱馬車の都会、橋の袂に露店の多く出る都会であつた。考へて見ても夢のやうな気がする。京橋日本橋の大通の中で、銀座通を除いて、西洋造りの大きい家屋は、今の須田町の二六新聞社のところにあつたケレー商会といふ家一軒であつた。それは三階の大きな建物で、屋上には風につれてぐるぐる廻る風測計のやうなものがあつた。何でも外国の食料品か何かを売つてゐた。

三越はまだ越後屋と言つて、大きな折れ曲つた店に黒い中に白く抜いた字の暖簾が長くかゝつてゐて、中から、番頭や小僧の「おー、おー」と言ふやうな一種諧調のある呼声が聞えた。通りも狭く、成ほどロチの眼には汚い狭い暗い東洋の都会といふ風に映じたであらうと思はれる。須田町の突当りは、楊柳などの鈍々とした広い火除地で、例の昔の錦絵にある東京新名物の石造の眼鏡橋が架つてゐた。

(445ページ)

このように、京橋・日本橋あたりも西洋造りの大きい建物は一つしかなく、越後屋の昔ながらの様子、狭い通り、広い火除地など江戸時代の名残りの多いことが記されている。「京橋から、江戸橋を渡つて、両国橋に行く間、その間にはいかに多くの江戸式の細い露地が縦横につけられてあつたであらうか」(449ページ)、「眼鏡橋からずつと上野の広小路へと通つてゐる狭いゴタゴタした御成通、湯島の切通しの折れ曲つた細い道」(454~455ページ)などと露地の描写はこまかい。「見馴れた、大通りばかり歩いてゐるのは平凡で退屈なので、私はめづらしい露地から露地へと後には歩いた」(449ページ)ことからのものである。

大通りには馬車が走る。「今では余程の田舎でなければ見ることもできな

いガタ馬車が、例の喇叭を鳴して、雨後の泥濘の中を凄しくはねを飛して通つて行つた」(446ページ)。

夜の通り、橋の袂には食べ物などの露店が多く出た。

夜は通りには種々な食物の露店が出た。鮎屋、しる粉屋、おでん燗酒、そば切りの屋台、大福餅、さういふものが小さい私の飢をそゝつた。中で、今は殆どその面影をもみせないもので、非常に旨そうに思はれたものがあつた。冬の寒い夜などは殊にさう思はれた。それはすいとんといふもので、蕎麦粉かうどん粉かをかいたものだが、其の前には、人が大勢立つて食つた。大きな井、そこに入れられたすいとんからは、暖かさうに、旨さうに、湯気が立つた。そこにゐる中小僧が井を洗ふ間がない位にそのすいとんは売れた。

京橋の橋の西の袂には、今では場末でも見ることの出来ない牛のコマ切の大鍋から、白い湯気が立つて、旨さうな匂ひが行きかふ人々の鼻を撲つた。立派な扮装をした人達も平気で其処で立つて食つた。

食物と言へば、橋の袂には、大抵何処の橋の袂にも、さういふ露店が沢山出てゐた。今日考へると、成ほど支那の市街といくらも異つてゐない。柴口、牛別荘、遼陽あたりに行くと、今でもさういふ光景を目にすることが出来るが、中でも日本橋の袂と、江戸橋の袂と、荒目橋の袂とが一番盛んで賑やかであつた。大きな傘を張つた鮎屋、真鍮の大釜を光らせた甘酒屋、さういふ屋台の向うには、例の魚河岸の白壁が晴れた碧い空に浮き出して並んでゐて、錆びた川には、伝馬や荷足が一杯にまつて見られた。

(447~448ページ)

通貨には天保銭が使われていた。1銭には2厘足りないので馬鹿者、うつけ者の渾名に使われたこの天保銭は中々便利であつた。豆腐、蕎麦のもりかけ、鮭の切身、湯銭などがすべてこれ1枚で間に合った。天保銭1枚にまけるといふと餅はよく売れた。(446ページ)

これらは、その頃の東京の回想的描写である。

また、「両国の橋の袂は、昔、石川雅望の書いたやうな趣は、もうその時分は沢山残つてゐなかつたけれど、それでもまだ見世物はかなり残つてゐた。センチメンタルな節で客を引くのぞきからくり、大蛇の招牌、不憫な小人島、さういふものが店を並べて、大きな声で客を呼んでゐた」(449ページ)、「……薩摩原の大きな荒涼とした原、仲店がまだ今のやうに賑やかでなく、観音堂の裏に、砂書きや、猿や、居合抜きや、いろいろのものゝゐた浅草の奥山、此方の門から向うの門まで、易者の店や見世物や飲食店で一杯になつてゐた西本願寺の境内、……」(454ページ)、と見世物の多かったことを記している。

このように東京の町中を、そして郊外までも歩きに歩いた。そして先ほどみた京橋・日本橋の様子や橋の袂の露店の様子大道芸などの見世物をいろいろ観察した。その描写は庶民の息遣いを伝えてくれる。

(2) 伯母のたたずまい

「川ぞひの家」(455～457ページ)は、深川の大工町の小名木川ぞいの家にはひっそりと暮す伯母の思い出を記している。年末、主人の使いで鮭を2疋かつぎ、その方面に歳暮の使いに来たついでに立ち寄った場面である。

深川の高橋を渡って、それについて左に行くと大工町がある。その小名木川に臨んだ二階屋の入口の格子を明けて、その板敷で、幼ない録弥が何か音を立てていると、「『何だね、録かえ……』かう言つて伯母が驚いたやうな顔をして出て来た」。鮭を2疋持っているので驚いたが、ことの次第を聞いて安堵し、喜んで迎え入れてくれた。

母の姉で、やさしい芝居好の伯母だった。伯母はその頃、45、6歳、息子が1人、娘が1人いるが、実子ではない。夫に早く死なれて、針仕事などをして一人で暮していた。芝居もよいがお銭がかかるからと貸本屋で借りた本

を読むのを楽しみとしていた。

この家には、郷里からの往来のときなどに母、兄なども立ち寄った。

二階から眺めた小名木川の朝夕の景色は、今だに見えた。通つて行く舟、ギイといふ櫓の音、をりをり帆が大きな家のやうな影を欄干に漲らした。朝早く音かわに臨んだ家々のまだ起きない中から、「あさり！むきみ」かう叫んで、小さい櫓をあやつつて、ゆたゆたと流れに漂ひながらあさり舟が通つて行つた。それをあちこちで呼び留めると、小舟は静かに岸に寄つて来た。舟の中はあさりや蛤で一杯に満たされてゐた。伯母はよく呼びとめては、目ざるを持つて行つてそれを買つた。

午後には、颯鼓町から出て高橋に寄つてそして利根川へと出て行く小さな汽船がいつも通つて行つた。此汽船は私にはなつかしかつた。何故なら、それは私達が故郷から乗つて都会へ出て来た汽船であるから……。

母親も私達も田舎から往来する度毎、いつもこの伯母の川添ひの二階に泊つた。母と伯母は殊に仲が好かつた。…… (456～457ページ)

幼くして丁稚小僧となつた録弥少年にとって、この伯母がどれほどか頼りであつたらう。伯母にとっては幼くして丁稚奉公している録弥がどれほどか不憫でいとおしかったことであらう。

いずれ其時は、御馳走になつたり小遣を貰つたりしたであらうと思ふが、私ははつきりとその時のことを記憶してゐない。唯今も覚えてゐるのは、私が鮭を二疋小さい体へ負つて寒さうに出かけて行くのを門口に立つて遠くまで見送つた伯母のやさしい顔！ あの世の中の艱難にやつれた皺の多い神経性のなつかしい顔！

(457ページ)

(3) 兄への想い

「読書の声」(458～460ページ)は幼い録弥少年の兄に寄せた思いを記す。本郷のその近所まで使いに来た録弥は、「弓町三丁目……包荒義塾……」とつぶやきながらの兄の学ぶ包荒義塾に兄に会いたくてやってきた。

湧くやうに聞える読書の声！

私はなつかしくなつて、小さな姿を其窓に寄せた。其処には修業に出てゐる兄がゐるのである。しかし一面には、かういふ小僧姿の弟を他人に見られる兄を気の毒がつて、私は公然兄を訪れて行かうとはしなかつた。(458ページ)

兄がひょつくり出て来るのを期待した。兄は一家の運命を双肩に担い、懸命に勉強している。「下駄を買ふ錢もなく、着たきりの着物で、ぼろ袴を穿いて、そして一生懸命に勉強してゐる。それを思ふと、私の艱難などは、まだ言ふに足りない幼心にも私は思つた。しかし、一面では、かうして兄が勉強してゐるのが羨しく且悲しかつた」。

ふと格子を開けて出てきた人がいた。「私は慌てゝ其処を離れた」。しかし兄ではなかつた。「あの書生が兄だと好かつた。かうまた私は思つた」。再び窓際に近寄ることはしなかつた。そしてあることが頭をよぎつた。

不都合があつて、一時私が帰されたのを、詫びて再び其店に行つた時のことなどが私の胸を往来した。その時、「もう、そんなことをするんじゃないぞ、忘れても……な……」かう言つて、町の裏通にある小さな蕎麦屋で、なけなしの財布の錢をはたいて、天ぷら蕎麦を二つ奢つて呉れた……。私は私の眼に涙の滲んで来るのを覚えた。それをまぎらすために、私は路傍の小石を拾つてそして投げた。

(459ページ)

3 明治の東京一都心と山の手、近郊

(1) 市街の状況

本書の「再び東京へ」から以後は、1886（明治19）年に再び上京した後のことを描いている。

① 東京の変化

「再び東京へ」で、花袋は、「十四年頃の東京と十九年頃の東京ではかなりに夥しい変遷を少年の私の眼に映じさせた」（461ページ）、と記している。

そして「明治二十年頃」という箇所では、当時の東京についてつぎのように回想している。

その時分は、大通に馬車鉄道があるばかりで、交通が不便であつたため、私達は東京市中は何処でもてくてく歩かなければならなかつた。牛込の監獄署の裏から士官学校の前を通つて、市ヶ谷見附へ出て、九段の招魂社の中をぬけて神田の方へ出て行く路は、私は毎日のやうに通つた。（468ページ）

私は其時分からかなりの健脚家で、東京のあちこちを地図を見い見いひとりで大抵は歩き尽した。高輪の泉岳寺、芝の公園、神明前、石川島、築地の居留地、東本願寺、さういふところをよく歩いた。殊に、漢詩と和歌をやつてゐるので、近い名所一上野、浅草、向島などによく出懸けた。（470ページ）

その時分歩いた町で、私の記憶に残つてゐて、そしてすっかり變つて了つたのは、御成街道と、湯島の切通坂と、万世橋附近と、浅草雷門前と、神田の神保町通りなどであつた。湯島の切通の坂の細いゴタゴタした通などは、今でも別の世界ではないかと思はれる位に違つて私の頭に残つてゐる。そこには、古本屋や古着屋やが吹きまくる春の塵埃の中にゴタゴタと店を並べてゐて、人が肩を摩るやうにして歩いて行つた。

御成街道も細い道であつた。幅三間位しかなかつた。従つて、今と比べて、何んなに賑やかであつたらう。人が行く、荷馬車が行く、やれ子供が轢かれた、人が轢かれたといふ騒ぎである。又軒を並べた店にも、何んなに濃やかな複雑した不整な不揃ひな気分が漲つてゐたであらう。汁、寿司、大福餅、鰻井、さういふものが古本屋、古道具屋、古着屋と一列に軒を並べてつゞいてゐたのであつた。

眼鏡橋の橋の畔も賑やかであつた。今日さうした光景を私は東京の何処に求めることが出来るであらうか。露店、露肆、立ん坊、土方、さういふものが橋の袂に一杯に集つてゐて、橋畔にある共同便所の繁昌は一通りでなく、五人も六人も待たなければ用を足すことが出来ないといふ風であつた。まだその時分には破壊し切れない江戸の繁栄が残つてゐたのであつた。 (470~471ページ)

新しいものと古いものが併存していたのがかつての東京であつた、ということをつぎのように記している。

外国風の家屋と純日本式の家屋と相並んで軒をつらねてゐるのが、その頃の生活の状態のシンボルを成してゐた。それに、区劃をわけて、江戸風の町と外国風の町とが出来てゐた。一方は開け行く形、一方は衰へて行く形、一方は急進的、一方は保守的、さういふ二つの気分が東京の何処にも絡み合ひもつれ合つて巴渦を巻いてゐるのを私は見た。

さうかと思ふと、麴町の番町あたりに来ると、当路の大官……昔の書生……の大きな邸宅などがあつて、ひろい平坦な通を箱馬車が勇しく駆けて行つた。参議、卿から漸く大臣などといふ官名の出来た頃で、伊藤公の名誉が噴々として社会を押し立てゐた。 (471~472ページ)

東京の変化は、田舎からやって来た昔の友人などには殊にその感が深かつた。1892(明治25)年頃に郷里の鹿児島県に帰って久し振りに上京してきた友人Tは、昔の跡をさがすことができないで、市街の中を彼方此方を彷彿

た。そして「何も彼も変つて了ひましたよ。眼鏡橋（その言葉のなつかしさよ）あたりなんか、何う考へて見ても、昔の面影をさがすことができませんね。講武所へ入つて行けば、それでもいづらかその時分のさまが残つてゐますけれど、須田町あたりでは、とても昔のことは考へられません。それに、御成街道、浅草も変りましたな。もとの狭い通の気分などは、もう何処にもありません。……」と語った。（540ページ）

都会の変遷の中にあるために、——一見馴れてゐるために、それほどにも思はない変化、その中に時は経つて行くのであつた。

毎年見る上野の花、向島の花だ。それでゐて、上野も向島もその時分とは既に夥しく變つてゐた。上野には例の記念の黒門が既になかつた。東照宮の傍の大きな通りなどもできた。公園の樹木は日に月に煤烟に襲はれて枯れつゝある。鳥ももう昔私が子供で根岸にゐた時分ほど沢山集つて来ない。図書館も大きく出来た。それよりも、更に更に一層變つたのは向島の花だ。多くの工場の煤烟のために、又た土手を歩くもの多いために、桜は年々枯れて行つて、昔は花のトンネルだと言はれた言問あたりも、すつかりもう駄目になつてゐた。何も彼も移り変りつゝあつた。

言葉などにも、いろいろと新しい言葉が出来た。豆腐屋が鈴を鳴して歩いたり、齒入屋が鼓を鳴して通つて行つたりした。出来た当座だけは、めずらしいと思ふが、それがすぐ馴れて、昔からあつたもののやうに思ひ込んで了ふ。……

東京は益變りつゝあつた。（540～541ページ）

② 市区改正と東京の変化

其頃は東京は市区改正で喧しかつた。

明治初年の東京は、次第に新しい日本帝国の首都として打建てられつゝあつた。土蔵造りの家屋は日に減つて、外国風の建物は日増に加はつて行つた。日本橋の大通の改築が口の上に上されて、『無理に西洋風にするのも考へもんだ。日本風の土蔵が却つて首府の美観をそへてゐるぢやないか。』などと言ふことが新聞などに書かれた。

しかし新しい東京の要求は、漲るやうにあたりに満ちわたつた。御成街道は見る見る大きな通りになり、大通もぐつとひろくなつて行つた。橋梁のかけかへ、火消地の撤廃、狭い通りの改良、昔の江戸は日に日に破壊されつゝあつた。

水道工事もかなり面倒であつた。私は牛込の山の手の町の通が、すっかり掘り返されて、全くの泥濘に化し、下駄でも歩くことが出来なかつたのを覚えてゐる。私の歌の師匠の住んでいる田町の細い通などは殊にそれがひどかつた。

「丸で泥海ですな。」

「何うも水道工事でな。」

かう師匠も言つた。

鉄管が彼方にも此方にもごろごろと音がされて、泥鼠のやうになつた人足が、朝の寒空に、焚火をして、その周囲を取り巻いてゐたりした。例の鉄管事件などといふのがその頃にあつたのである。

都下の五大橋、この内の新大橋が一番最後まで元のまゝの木橋で残つたが、厩橋、吾妻橋、両国橋、新大橋、永代橋、それがすべて、古風な江戸式の木橋であつた時代が今更なつかしい。屋根舟なども、今では東京中二艘とか三艘とかしかないさうであるが、それを思ふと、いつの間にか—いつ變つて行くともなく變つて行つた東京だ。

(538~540ページ)

市区改正とは、1888（明治21）年8月16日、勅令62号をもって公布された「東京市区改正条令」にもとづく東京都市改造事業である。改正事業の対象は、旧15区の約7割強が改正区域と定められ、道路316路の新設・改修のほか、河川については新鑿8件、改修22件、外濠整理4件、さらに橋梁、鉄道の設計、公園の新設49カ所（約100万坪）、諸市場・屠殺場計8カ所、火葬場5カ所、共同墓地6カ所などの設置が計画され、直ちに着手された。市区改正事業は、以後1919（大正8）年に都市計画法が公布されるまで31年間にわたって継続された。結果は道路123線、公園32カ所、運河開設など7カ所が完成したほか、上水道私設を完成した。ただし下水道は大部分が未完成で、市

場と築港についての計画は着手されないまま中止となった。⁽⁷⁾ その間の支出総額3730万円のうち道路費が2596万円で、総額の69.5%、上水道費が1043万円で、27.9%であった。⁽⁸⁾ 日比谷公園はこの改正事業の一環として開設されたが、1893（明治26）年設計されたものの起工は1902（明治35）年4月であった。⁽⁹⁾

その頃でも、東京は、私が最初に来た頃に比べると、夥しく変つて行つてゐたのであつた。市区改正は既にその八分を完成し、地下の水道も出来、家並なども非常に立派になつた。四五年前に出来た日比谷の公園も、その時は樹木が貧弱で、何だ、これでも公園かと思つたほどであつたが、その頃はもう立派な樹木の影の多い公園になつていた。戦地に行くことが決つた日、そこを通ると、梅が美しく空に捺すやうに咲いてゐた。

(588ページ)

③ 「東京の発展」

此頃の東京の発展は目覚ましいものであつた。変遷の空気の中に浸つてゐては、それが目に立つてそれとわからぬけれど、田舎からでも来て、ひよつとその真中に置いて行かれれば、何処が何うかさっぱりわからなくなつたに相違なかつた。市区改正は既に完成され、大通の路はひろく拡げられ、電車は到るところに、その唸るやうな電線の音を漲らせた。

明治十四年あたりの東京は？ 泥濘の道に円太郎馬車の駛つた東京は？ 橋の袂に飲食店の多く出てゐた東京は？ 箱馬車の通つた時分の東京は？

電車が出来たために、市の繁華の場所も、次第に変つて行つた。郊外に住む人も、買物をするには、その近所で買はずに、電車で、市街の中心へと出て行つた。従つて

(7) 『東京百年史 第二巻』1972年 東京都 1436ページ。

(8) 前掲(7)と同一書 1441ページ。

(9) 藤森照信『明治の東京計画』1990年 岩波書店 254ページ。

三越、白木屋、松屋などといふ呉服店も大きな構へとなつた。

主として、電車と交叉するところ、客の乗降の多いところ、さういふ箇所が今迄の繁華を奪ふやうになつて、市街の状態が一変した。銀座の尾張町の角、神田の須田町、上野の広小路、それに見附々々の街は昔と丸で變つて了つた。

交通の便につれて、住民の種類の変つて行くのは、寧ろ本能的、無意識的と言つても好い位で、注意して見てみると、其処に一番烈しい變遷の渦を巻いてゐるのを見ることが出来た。 (657～658ページ)

東京での市内電車の最初は、1903（明治36）年8月22日、東京電気鉄道会社の新橋～品川の電車運転開始である。同社の電車はついで11月に新橋～上野間、翌1904年3月上野～浅草間が開通した。他方、東京市街鉄道会社による電車は1903（明治36）年9月に数寄屋橋～神田間が開通し、ついで同10月日比谷～半蔵門間、同11月半蔵門～有楽町間が開通するなど続々開通した。⁽¹⁰⁾

なお、1906（明治39）年の鉄道国有法以前に、現在の山手線の新橋～品川間は1872（明治5）年5月、品川～池袋は1885（明治18）年3月、田端～上野間は1883（明治16）年7月、上野～秋葉原間は1890（明治23）年11月（貨物のみ）、池袋～田端間は1903（明治36）年4月が開通している。中央線も新宿～飯田橋間が1894（明治27）年10月、飯田橋～御茶の水間は同年12月に開通した。⁽¹¹⁾

著しい東京の変貌を花袋は描写する。

大通も殆ど渾て江戸時代の面影を失つて了つた。破壊と建設との縮図は、一時東京の市街に不思議な、不統一な光景を示したが、今ではそれも一段落ついたやうに、不統一のままに落附いて了つた。日比谷公園、凱旋道路、東京駅の大きな停車場、あ

(10) 『東京百年史 第3巻』1972年 東京都 611ページ。による。

(11) 石塚裕道『東京の社会経済史』1977年 紀伊国屋書店 99ページ。

そこいらあたりも、考へると、全く一変して了つたものだ。 (658ページ)

変化の大きいのは丸の内、日比谷のあたりである。

日比谷は元は練兵場で、原の真中に大きな銀杏樹があつて、それに秋は夕日がさし、夏は砂塵、冬は泥濘で、此方から向うに抜けるにすら容易ではなかつた。ことに、今の有楽門から桜田門に通ずる濠に添つた路は、雨が降ると路がわるく、車夫は車の歯の泥濘に埋れるのを滴したところである。そしてそれが少くとも明治二十七八年まで、さういふ風であつた。そして日比谷の大神宮に行く途中に、グランドホテルといふ今ではあんな小さな小さな外国旅館なんぞ見たくても見られないやうなホテルがあつた。そこを歩いて私は中央新聞社に毎日通勤した。

私が東京に来た頃には、東京府庁は土橋の中にあつた。その時分には、流石に、まだ江戸の昔の空気が処々に渦を巻いてゐて、高い火見櫓、大きな乳のついた門、なまこじつくいの塀などが並んだ。確か府の中学校もその構内にあつた。私は一年二季に、僅かな父親の恩給の金を其処に受取りに行つた。其頃は役人達は日本風の家屋の一部に卓を並べて、傍に本箱を置いて、小さな硝子張りの口から書類を受渡した。今では、田舎に行つても、もうさうした光景は容易に見られない。

従つて丸の内は、いやに陰気で、さびしい、荒涼とした、寧ろ衰退した気分が満ちわたつてゐて、宮城も奥深く雲の中に鎖されてゐるやうに思はれた。何といふ相違であらう。今は濠の四囲を軽快な電車が走り、自動車飛び、をりをりは飛行機までやつて来た。今ではさびしいとか陰気とかいふ分子は影も形も見せなくなつて了つた。宮城の松、その上に靡く春の雲、遙かにそれと仰がれる振天府、すつかり新しく生々とした色を着けて来た。 (658～659ページ)

つづいて、東京の旧域郭外の地区の変化に目をやる。

外濠の電車の通るあたりも、全く一変した。溜池—その岸には、春はなづ菜、根芹

などが萌えて、都人士が摘草によく出かけて来たものだが、それが埋立てられて、今の賑やかな狹斜街になり、青山御所の向うには、大きな東宮御所が建築された。この濠端の花の見事なことは、今は東京名所の一つに数へても好い位だ。弁慶橋の柳の緑、春雨の烟る朝などは、何とも言はれない情趣に富んでゐる。

四谷、神楽坂、本郷、この三つの通りは、城の外郭で賑やかなところであつた。四谷はさう昔と変つてゐない。神楽坂も半分は元のまゝである。この濠端の道、これが随分長い殺風景な路で、春先、風の吹く頃はほこりが立つて、古着屋の店の色の褪せた古い着物などが翻つてゐたものだが、今ではその面影を見ることが出来ない。本郷の通りは概して幅広くなつた。あの有名な栗餅の店ももうなくなつた。

(660ページ)

さらに、記述は下町に及ぶ。

でも、下町、ことに、日本橋の奥の方に行くと、今でも江戸の町の空気の残つてゐるところがないでもない。親父橋、思案橋附近、横山町あたり、そこらに行くと、土蔵が連つて並んでゐたり、大きな問屋があつたりして、何となく三百年の江戸の町の繁華の跡を見るやうな気がする。

それから下谷の竹町、御徒町の裏通りにも、こんなところがあるかと思はれるやうな、二三十年以上も時勢に後れた街の光景を見ることがある。そこには、江戸時代と言ふよりも、寧ろ明治十五六年代の街の縮図を私に思はせる。

概して、東京の外廓は、新しく開けたものだ。新開町だ。勤人や学生の住むところだ。そこには昔の古い空気は残つてゐない。江戸の空気は、文明に圧されて、市の真中に、寧ろ底の方に、微かに残つてゐるのを見るばかりである。 (660ページ)

そして、この変化についての記述を感慨をこめてしめくくる。

かうして時は移つて行く。あらゆる人物も、あらゆる事業も、あらゆる悲劇も、す

べてその中へと一つ一つ永久に消えて行つて了ふのである。そして新しい時代の新しい人間とが、同じ地上を自分一人の生活のやうな顔をして歩いて行くのである。五十年後は？ 百年後は？ (661ページ)

以上の文章は明治期の東京の市街部の状況や変化をつぶさに示す。

(2) 山の手の風景

「山の手の空気」は牛込界隈の風物をつぶさにに描写している。

花袋はこの牛込のいくつかの所に移り住んだ。1886(明治19)年7月14日「一家をあげて牛込区市ヶ谷富久町一二〇番地(会津侯邸内)に移る」, 1889(明治22)年「牛込納戸町に転居」, 1890(明治23)年「牛込甲良町に移る」, 1896(明治29)年2月「四谷内藤町から牛込区喜久井町二十番地に転居」, 1899(明治32)年「二月九日, 分家, 太田玉茗の妹リサ(伊藤氏, 明治十三年十二月二十三日生)と結婚」, 1902(明治35)年「六月十八日, 牛込納戸町に転居」・「同月十一日, 牛込原町に転居」, 1903(明治36)年10月「十六日, 小石川小日向水道町に転居」, 1904(明治37)年5月11日, 牛込薬王寺町に転居, 十一月十日, 牛込弁天町に転居」, 1905(明治38)年6月「二十七日, 牛込山伏町に転居」というのが, 1906(明治39)年12月に東京市外代々木山谷132に住宅を新築, 転居するまでの居所の推移である。⁽¹²⁾ この間, 一時小石川区日向水道町に住んだ以外は牛込のいくつかの町筋を転々, 居住した。

このように牛込界隈が花袋の生活の場であった。

其処にも此処にも私がゐた。汚い袴をはいた私, すり減した下駄を穿いた私, 蒼白い神経質の顔をした私, 髪を長くして変な風にわけた私, 兄と伴れ立つて歩いて

(12) 『田山花袋全集 新輯別巻』1974年 文泉堂書店の「年譜」による。

ある私，母親と一緒に買物に出かけて行つてある私，恋の思を闇に包んで人知れず娘のある家の周囲を彷徨してある私，焼芋を買つてある私，将来の青雲を夢みつゝ得意さうに歩いてある私，考へ出して来ると，その私は際限なく，其処の町の角，彼処の町の通，屋敷の前などに見えた。 (513～514ページ)

このようによく町を歩き，つぶさに観察している。

今でも其処に行くと，所謂山の手の手が空気が私を堪らなくなつたく思はせる。子供を負つた束髪の子君，毎日々々倦まずに役所や会社へ行く若い人達，何うしても山の手だ。下町等では味はひたくても味ふことの出来ない気分だ。

山の手には，初めて世の中に出て行つた人達の生活，新しい不如意勝の，しかし明るい若い細君のある家庭，今に豪くならなければならぬといふ希望の充された生活，さういふ気分が到る処で巴渦を巻いてある。その証拠には，新世帯の安道具を売る店とか，牛肉の切売店とか，安い西洋料理とか，さういふものが際立つて眼に附くのが牛込の街の特色だ。 (513ページ)

「牛込で一番先に目に立つのは」昆沙門の縁日で，電車が無い頃は山の手の人達が神楽坂の通に出かけたので非常に賑やかであった。大蛇の見世物，露店や植木屋も出た。「中町の道—そこは納戸町にゐる時分よく通つた。北町，南町，中町，かう三筋の通りがあるが，中でも中町が一番私に印象が深かつた。他の通りに比べて，邸の大きなものがあつたり，裁込の奇麗なものがあつたりした。そしてそこからは富士の積雪が冬は目がさめるばかりに美しく眺められた」(515ページ)，「……病後の体を母につれられて，運動にそこ此処と歩いたことが思い出される。やきもち坂はその頃は狭い通であつた。家もごたごたと汚く並んでゐた。坂の中ほどに名代の鰻屋があつた」(517ページ)。このように牛込の町筋を描写している。

このように通りに面した町筋の牛込辺りであるが、一步裏手に入るとそこには自然がいっぱいである。

柳町の裏には、竹藪などがあつて、夕日が静かにさした。否そればかりか、それから段々奥に、早稲田の方に入つて行くと、梅の林があつたり、畠がつぶいたり、昔の御家人の零落して昔のまゝ残つて住んでゐるかくれたさびしい一区画があつたりした。山の手はさびしかつた。早稲田近くに行くと、雪の夜には狐などが鳴いた。「早稲田町こゝも都の中なれど雪の降る夜は狐しばなく」かう私は詠んだ。

早稲田の学校なども小さかつた。建物が二つか三つぼつんと畑や田圃の中に立つてゐたといふ風であつた。その附近の町屋も軒を並べてはゐるたが、到底今の繁華を夢想することも出来ないほどさびしかつた。生徒も少なく、大抵は和服で、ヒヤメシ草履などをはいて〇君などは通つた。 (518ページ)

早稲田から鶴巻町へ出て来るところは、一面の茗荷畑で、早稲田の茗荷と言えば、野菜市場にもきこえたものであつた。私達はその茗荷畑の中に細く通じて末は野の雑木林の中に入つて行く路をよく歩いた。時には又、婆さんがその取り立ての茗荷を籠に入れて負つて売りに来た。

静かに入つて物を思つたり何かするに好いやうな林は、まだその頃はそここゝに残つてゐた。茱萸の実が赤く人知れず熟してゐたり、初茸が出たりするやうな松林があつた。冬は裏の林に風が来た。それに、その時分は一つしかなかつた山の手線の汽車の音が、夕暮に遠く野を掠めてきこえた。 (518~519ページ)

花袋は、1896（明治29）年2月に四谷内藤町から牛込喜久井町に引越した。そこはある大名の下屋敷のあつた跡で、築山は丘に、池は田になっていた。屋敷の跡は広い原で、そこに1軒ぽつんとある家を花袋一家は借りた。朝に夕にそのひろびろした田と丘とに対して尽きない空想に耽つた。田を越した向こうの丘の上の眺望が非常に良かった。丘の向こうには、榛の並木が

並び、彼方の路を通る車の音が静に秋の空に響いた（519ページ）。

私は一人で又は友達と一緒に、よくその丘の上に立つた。今ではもうそうした眺望台を私達は何処にも得ることは出来まいと思ふ。ひろいひろい地平線の上に漂つた雲、向うに連りわたつた目白台の翠微、下に江戸川が細く布を引いたやうに流れてゐるのが手に取るやうに見えた。秋の静かな日の夕ぐれなどは殊によかつた。それに、丘の上には一面に萱原がさらさらと鳴つた。（519～520ページ）

その丘の上から見ると、桔槔、庭、私のゐる狭い書齋、さういふものが唯一目に見わたされた。又、反対に私の家の縁からは、丘の上に立つてゐる人の顔が赤く夕日に照されて見えた。私は月の夜などに、榛の林をぬけて、丘の上を通つて、そして家に帰つて来たりした。（520ページ）

(3) 東京の西郊

「川ぞひの路」は、西郊を描写している。

花袋は、四谷の大木戸（四谷内藤町）に移り住んでいた頃、1日20銭の日給で、さる歴史家の家で午後3時まで写字の仕事をしたが、そこから毎日、新宿の先の角筈町の裏を流れる玉川上水に添って歩いて行った。

新宿の山手線の踏切……それも唯一線あるばかりであつたが、それを越ゆると、玉川上水は美しい水彩画のやうな光景を次第に私の前に展けて来た。楢の林があると思ふと、カサカサと風に鳴る萱原がある。坂路にそつて昔から住んでゐるらしい百姓家が一軒ぼつねんとしてある。栗の木がある。と、帯を引いたやうな細い水の流れが、潺湲として流れてゐるのが眼に入る。

水が一とこ急湍をつくつて、泡を立てゝ流れた。

斜坂になつて両方の岸には、秋は美しく尾花が粧点された。橋がところどころに絵のやうにかゝつてゐた。（492～493ページ）

これは郊外の描写である。

「丘の上の家」, 「郊外の一小屋」は、郊外に住む二人の文人を尋ねたことについてのものである。

「丘の上の家」(544~554ページ)は国木田独歩との交遊を記すものであるが、そこは太田玉茗とともに、渋谷の先の国木田独歩の家の訪問の様子が記されている。それは11月の末、「東京の近郊によく見る小春日和で、菊などが田舎の垣に美しく咲いてゐた」。この日二人は道玄坂のぼれん屋という旅館に逗留している宮崎湖処子を尋ねたが、あいにく留守で、近くに住む国木田独歩を訪ねたのである。⁽¹³⁾

渋谷の通を野に出ると、駒場に通ずる大きな路が檜林について曲つてゐて、向うに野川のうねうねと田圃の中を流れてゐるのが見え、その此方の下流には、水車がかゝつて頻りに動いてゐるのが見えた。地平線は鮮やかに晴れて、武蔵野に特有な林を持つた低い丘がそれからそれへと続いて眺められた。私達は水車の傍の土橋を渡つて、茶畑や大根畑に添つて歩いた。(544ページ)

二、三度、この辺に国木田という家はないかとたずね、「ぢや、あそこだ。牛乳屋の向うの丘の上にある小さい家だ」と教えられた。

少し行くと、果して牛の五六頭がごろごろしてゐる牛乳屋があつた。「あゝ、あそこだ、あの家だ！」かう言つた私は、紅葉や栽込みの傾斜の上をチラチラしてゐる向うに、一軒小さな家が秋の午後の日影を受けて、ぼつねんと立つてゐるのを認めた。

(13) 「年譜」に「一八九六(明治二九)年 二六歳 十一月、宮崎湖処子の紹介で初めて国木田独歩を上渋谷村の孤屋に訪う」とある(前掲(12)と同一書 279ページ)。

又少し行くと、路に面して小さい門があつて、傾斜の下に別に一軒また小さな家がある。 (545ページ)

そこと思いながら入るが、その家の上さんが「国木田さん、国木田さんはあそこだ！」と言って、夕日の明るい丘の上の家を指した。

路はだらだらと細くその丘の上へと登つて行つてみた。傾斜地、目もさめるやうな紅葉、畠の黒い土にくつきりと鮮かな菊の一叢二叢、青々とした菜畠一ふと丘の上の家の前に、若い上品な色の白い瘦削な青年がぢつと此方を見て立つてゐるのを私達は認めた。

「国木田君は此方ですか。」

「僕が国木田。」

此方の姓を言ふと、兼ねて聞いて知つてゐるので、「よく来て呉れた。珍客だ。」と喜んで迎えて呉れた。 (545～546ページ)

「……縁側の前には、葡萄棚があつて、斜坂の紅葉や稗樹を透して、渋谷方面の林だの丘だの水車だのが一目に眺められた」この家は、「六畳一間、そのつぎが二畳、その向うが勝手となつて」いる (547ページ)。

初対面であるのに話はずみ、日の暮れるのも忘れてしまった。帰り仕度をする時、引きとめられ、「今、ライスカレーをつくるから、一緒に食つて行き給へ」と言われ、「大きな皿に炊いた飯を明けて、その中に無造作にカレー粉を混ぜた奴を、匙で皆なして片端からすくつては食つたさまは、今でも私は忘るゝことが出来ない。『旨いな、実際旨い』かう言つて私達も食つた」 (547～548ページ)。

この丘の家はよく行く所となり、そこに泊まったりするようになった。

その丘の上の家の記憶は、私にはかなり沢山ある。訪ねて行くと、国木田君は縁

側に出て、「おーい」と声をあげて、隣の牛乳屋を呼ぶ。そして絞り立ての牛乳を一
二合取り寄せて、茶碗にあけて、それにココヒイを入れて御馳走をした。

(549ページ)

.....

丘の上の後の方には、今とは違つて、武蔵野の面影を偲ぶに足るやうな林やら丘
やら草薮やらが沢山にあつた。私は国木田君とよく出かけた。林の中に埋れたやう
にしてある古池、丘から丘へとつゞく路にきこえる荷車の響、夕日の空に美しくあ
らはれて見える富士の雪、ガサガサと風になびく萱原薄原、野中に一本さびしさう
に立つてゐる松、汽車の行く路の上にかゝつている橋—さういふところを歩きなが
ら、私達は何んなに人生を論じ、文芸を論じ、恋を論じ、自然を語つたであらう
か。……

(549ページ)

「郊外の一小屋」(567～570ページ)は柳田国男の居宅を訪ねたときのこと
である。

春のまだ浅いある日の午後、社から帰りを山手線でぐるりと品川を廻つて渋谷で
下車した。

もう四時すぎであつた。私は停車場を出て宮益の通へ行つて、それからかねて聞
いて知つてゐる路を左へと入つて行つた。さびしい田舎道だ。霜解の道はまだ凍ら
ずに、靴が深く深く入つた。私は成たけ路の好いところを拾ふやうにして歩いた。

今では、そこはすっかり家屋が建つて、小さな工場の煙突から細い煙が颯つたり
するのが電車の中から見えるが、その時分は、まださびしい郊外の、家と言つても
ちらほら藁葺の屋根が見える位のものであつた。柳田君はその時分一二ヶ月ほどそ
この農家のある一間を借りて、そこから役所の方へと通つてゐた。

まだ松岡姓で、柳田家へ養子に行く話のきまつたばかりの時であつた。今の夫人
が十八九であつた。まだお茶の水に通つてゐた。

(567ページ)

花袋は丸善に寄って、受け取ってきたかねてから注文していたいくつかの本をもっていた。

泥濘の道を通りすぎると、大きな榊の樹の下に、さびしい一軒の藁屋があつて、そこの一間に柳田君が住んでゐた。

「一君ゐますか。」

幸にゐて、私は縁側から入つて行つた。竹藪に淡く薄れてゐる夕日、梅の白く咲いてゐる畑、霜に赤くやつれた菜畑、さういふものがいかにラスチックなさびしい感じを私に起させた。

「好い処だね。」

「ちよつと好いだらう？」

(568ページ)

文芸の新しい思潮についてなど、話はずきない。「其夜は、夕飯を御馳走になつて、夜の更けるまで話した。そして、『泊つて行きたまへ』と違つてとめるのを、若い妻が待つてゐるだらうと思つて、最後の山手線で新宿まで来て、そこで乗替へて帰つてきた」(570ページ)。

ここにも、東京近郊農村の風景が描写されている。

花袋は、「私はその前年の十一月に、代々木の郊外に新居をつくつた」(601ページ)と記すように1906(明治39)年に、代々木山谷に住宅を新築した。

……さう思つて、郊外の畑の中に、一軒ぼつつりとその新居を構へた。朝の白い霜、遠くにきこえる市声、場末の町の乗合馬車の喇叭の音、雪解のわるい路、それでも私は静かに社から帰つて後の時間を書齋に過すことを得たのを喜んだ。

(601～602ページ)

「社への往復の途中、新たに開けた郊外の泥濘深い路を、長靴か何かで、……」（600ページ）と道の悪いことを記している。

社とは博文館である。それは山崎直方、佐藤伝蔵を主任とする『大日本地誌』の編輯の仕事である。1903（明治36）年からである。日露戦争が始まった1904（明治37）年3月に博文館から派遣の私設第二軍従軍写真班主任として従軍するなどして一時編纂事業から遠ざかるが、帰国後再び従事した。初めは編輯室は大橋家の邸宅の一室であったが、やがて小石川の工場へ移された。

工場の空気は、〇家の邸宅とは丸で違つてゐた。そこには午饭に食ふ旨い西洋料理もなければ、鰻井もなかつた。菓子などもなかつた。茶はひどい番茶で、卓の上はいつも塵埃と煤烟とで真黒になつてゐた。 (637～638ページ)

『大日本地誌』はあまり売行きがよくなって博文館での継子扱いになり、したがって張合抜けがして、あまり力を入れられなくなった。会合はだんだん少なくなり、週1回となった。

一週一回の木曜日がすぐやつてきた。「又、今日は小石川だ。」かう言つて私は社から廻つて行つた。工場のけたましい汽笛、職工達の荒つばい気分、煤烟、ぞんざいな普請から来るわるい感じ、さういふ中で、私達は時には眠い半日を過し、時には寒い一夜をすごした。退屈な写真の選択に二週も三週もかゝつたりした。

「木曜日はやり切れないな。」

かうした不平は、いつも私の口から出た。

それも無理はなかつた。私の郊外の家は遠かつた。電車から電車へ乗り移つて、Yの停車場から下りると、あたりはすっかり寝静まつて、灯影も稀に、軒燈が唯さびしくあたりに輝いてゐるばかりであつた。…… (638～639ページ)

4 庶民の生活

1899（明治32年）2月9日に分家し、同月20日に結婚するまで、花袋は田山一家に居住をともにしていた。父を西南戦役で亡くしている田山家の当主は兄である。この兄の家に同居していたのである。

兄実弥は、1880（明治13）年に館林の小学校を卒業し、東京本郷弓町3丁目の包荒義塾（中村峰南の漢学塾）に入る、1886（明治19）年叔父横田良太の旧主岡谷繁実認められ、岡谷が出仕していた修史局の書記となる、1888（明治21）年兄、叔父横田良太の長女登美と結婚、1891（明治24）年5月14日 登美死去、1895（明治28）年「兄実弥登、文科大学に新設の史料編纂掛に職を得る」、という経過である⁽¹⁴⁾。

修史局とは官立の国史編纂所である。1869（明治2）年に史料編輯国史校正局が和学講談所内に設置されたが、それはまもなく修史局となった。それは2年後に修史館と改称された後、さらに1898年（明治31）に帝国大学に移管されて臨時編年史編纂掛と称した後、史料編纂掛となった。後の東京大学史料編纂所である⁽¹⁵⁾。実弥がどのような身分であったのかは不祥であるが、一公務員であることには相違ない。

憲法発布の日、一家は牛込納戸町に居た。そのときの住いは、2畳、6畳、4畳半の3間で、ここに兄夫婦、母、花袋、弟と一緒に住んでいた（466ページ）。場所は牛込の中町の通りがほぼつきようとする所にあり、大家は大蔵省の属官を勤める人である（516ページ）。

七円位の家賃の狭い家屋、庇の低い暗い室、さういふところに住んでゐてさへ、兄の月給では、生計が月々足りないので困るほど私の家も貧しかった。

(14) 前掲(12)と同一書の「年譜」による。

(15) 『角川日本史辞典』1966年 角川書店。

(481ページ)

牛込の甲良町に一家が移ったのはその翌年であった。家賃が高いというのでこの甲良町の親類の借家に移った。「その甲良町の家は二間しかなかつた。長火鉢の置いてある方が六畳、座敷が八畳」という狭い家であった。ここに兄夫婦、母、弟、そして録弥の5人が生活した。「母と嫂と兄との間柄が円満に行かなかつた」というが、それは狭隘な住いと家計不如意のゆえでもあろうか。ここで兄嫁は死去した。花袋と弟は腸チフスにかかった。(481～482ページ)

……その座敷の裏の奥の所に面した窓のところに、私は机を置いて、精々と筆を動かしたり、限りなく甘い空想に耽つたりした。机を押しつけて置いたところが壁で、右の障子に一枚硝子が大きく入つてゐたが、その障子を透しては何もない狭い汚い小さな庭が見えた。そこで私はよく涙を流した。思ひのまゝにならぬ涙、少女にあこがれるゝ涙、嫂の不意の死に対する涙、社会に出て逸早く成功した人達を羨む涙、家計の貧しさを悲しむ涙、焦せつても自己の力の足りないのを悲しむ涙……。

(482ページ)

納戸町にいる頃、弟と2人で神田にある英語の学校に通った。「牛込の監獄の裏から士官学校の前を通つて、市ヶ谷見付へ出て、九段の招魂社の中をぬけて神田の方へ行く路は、私は毎日のやうに通つた」(408ページ)。道が遠いので帰りは腹がへって困った。途中にある菓子屋、ことに餡パンを売る店の前では、銭があるとつい買ってしまふ。家が近くなると、豆腐だ、いや香々だと昼食のおかずのあてっこをする。

豆腐の煮やつこ、油揚げの焼いたのかがある時は、それでも御馳走であつた。大抵は沢庵の漬物か赤漬薑か、さらさらと飯を食つた。(469ページ)

半ば居候的な弟である録弥がいることによっていつそう逼迫したであろうが、この録弥を抜きにしても、この一俸給生活者である実弥の家族の生活は逼迫していたであろう。この家族の生活の描写は、当時の庶民の生活状況を示しているといえる。

5 明治の時代状況

(1) 学校と上野図書館

丁稚小僧の時、兄が学んでいる包荒義塾を、そっと訪れた。一家の運命を担って必死に勉学に励む兄の苦勞を思うとともに、兄を羨ましく思った録弥である。

花袋は、16歳のとき、陸軍軍人を志し、士官学校（または幼年学校）にそなえて麴町中六番町の促成学館に学び、18歳にその受験に失敗した後、神田仲猿楽町の日本英学館（後の明治学館）に移って英語を学ぶ。20歳のとき、弁護士たらんとして日本法律学校（いまの日本大学）に入学したが、学資が⁽¹⁶⁾続かず退学したというようにいくつかの学校で学んだ。その一つの学校の様子をつぎのように記している。

「私と弟とは一緒に神田にある英語の学校に通つた」（468ページ）。その学校は、「自由党の時の有力者林包明といふ人の建てたもので、星亨などが顧問であつた。あの学校は後に、佐々木侯爵の子息の学校になつて、明治学館と言はれたが、勤くともそこで三年ほど私は英語を習つた」（472ページ）、「私は会話や英文法の時間には、いつも欠席した。会話などは私には何うでも好いといふ気がしてゐた。で、私は教場の上草履のまゝで、神保町通や小川町通を歩いた。貧しい書生達に取つて幸ひなことには、その小川町を少し行つて右に折れて又左にちよつと入つたところにいろは屋といふ貸本屋があつ

(16) 前掲(12)と同一書の「年譜」による。

た。今では本の代価を払はないでは貸して呉れる貸本屋もないやうだが、その頃はその金がなくつともドシドシ借りて来られた。……」(472~474ページ)

「上野の図書館」(488~491ページ)は、上野の図書館とそれをめぐることからを記している。

上野の図書館は、其時分はまだ美術学校の裏の方にあつた。私に取つては、その図書館は忘るべからざるものの一つである。私は一週に二三度は必ず牛込の山手からてくてくと其処へ出かけて行つた。

五銭出して、後には私は二階の特別閲覧室に行つた。大きな硝子窓、白いカーテン、外にざわざわ動いて見える新緑、キラキラする日影、その窓際で、私は終日長く本を読んだり空想に耽つたりした。

閲覧者は大勢居るけれども、少しでも声を立てると、しつと言はれるので、室内は水を打つたやうに静かで、監視のをりをり静かに通つて行くスリツパの音がきこえるばかりであつた。

ここで若き花袋は本を読んだ。「私は近松、西鶴をすべて其処で読んだ。『国民之友』に出た蘆花君の翻訳になつた六号活字の外国文学の紹介、それは殊に私には有益であつた」、「ツルゲネフの『獵人日記』の梗概、中でも『山番』の紹介が私を驚かした。私は段々トルストイ、ドストイェフスキイ、ゴーゴリなどといふロシア文学の作家達の名を知つた」、「トルストイの『戦争と平和』の英訳は、其時分から図書館にあつた。で、私は半分位しかわからなかつたけれど、兎に角毎日行つてそれを読んだ」(488~489ページ)。

兎に角、私は図書館に三年四年を送つた。矢張、その時分にも電車はないので、私は東照宮の階段を下りて、不忍池をぐるりと廻つて、そして本郷の通から牛込の方へと歩いててくてく帰つて来た。途中、さまざまの空想やら妄想やら、乃至は小説の構成などに頭を一杯にして……。過ぎ去つた昔よ、なつかしい昔よ。

(491ページ)

(2) 憲法発布の日

1889（明治22）年2月11日、大日本帝国憲法は公布された。「議会の開会式やら何やら、さういふ祝日が其所に沢山にあつたけれども、私は何も覚えて居なかつた。唯、憲法発布の日、その日の雪を私は覚えてゐる」（466ページ）とこの日のことを花袋は記している。

その前の日から俄かに雪模様になつたが、夜は人通りが絶える位に、凄しい雪になつた。

「生憎だな、目出度い日だと言ふのに。」

かう私の母は言つた。

私の家は、其時は、田舎から出て来た最初の山の手の奥の家からN町へと引越してゐた。兄と結婚した従妹の丸髷には、赤い派手な手絡がかけられあつた。二畳、六畳、四畳半の三間。

それほどに降り頻つた雪もそれでもあくる朝はからりと晴れて、路は泥濘ではあるけれども、下町の方へ祝典を見に出かけて行く人達が沢山あつた。日本橋、京橋には屋台だの芸者の手古舞だの茶番だのがあつて、賑やかだといふことであつた。

「行つて見ないか、録。」

兄も母もかう言つて勧めて呉れたけれど、私は丁度何か文章か詩かを昨夜から作つてゐたので、「面倒臭い」と言つて、終日家に引籠つて暮した。兄は弟をつれて賑かな方へと出かけた。 (466～467ページ)

近所の町々でも種々の祝典の催しがあった。所々にできた屋台からは賑やかな太鼓や囃の音が聞えてきた。余りに人が出ていくのにつられて花袋も、「泥濘と残雪との午後の日影の中を、通りの方へと出て行つた」。仮装の行列が通つて行つた。(467～468ページ)

(3) 日清・日露戦争

「出発の軍隊（日清戦争）」（498～500ページ）「陣中の鷗外漁史」（570～576ページ）は二つの戦役に言及した箇所である。

それに砲兵工廠の活躍した煤烟の光景は、今でも私の眼にちらついて見えた。勿論、その時は日露の戦役の時ほどではなかつたけれど、それでもその水道橋、小石川橋の一区劃は、青い、黒い、白い煤烟で凄じく塗りつぶされてゐるのを私は見通さなかつた。
(499～500ページ)

日露戦役には、博文館から派遣の私設第二軍従軍写真班主任として従軍した。宇治から戦地に出発する前、広島で軍の軍医部長の森鷗外を宿所に訪ねた。初対面であるのに、鷗外から「まッ、此処へ来たまへ。花袋君だね、君は？」といわれたが、「この『花袋君だね君は？』が非常に嬉しかつた」と花袋は記している（573ページ）。

(4) 明治天皇の逝去

「号外壳の声、それも戦時に於けるやうな賑やかな声でもなく、さうかと言つて、小さな事件を大きく誇張的に報道する浮はついた声でもなく、政治の変革を報ずる物めづらしさといふ声でもなく、何処となく沈み切つた悲痛な号外壳の声が街路を走つて通つて行つた」（684ページ）ではじまる「明治天皇の崩御」は明治天皇の逝去をめぐる感慨を記したものである。朝、郵便箱の所に行く。「崩御の号外がそこに入つてゐた。『あゝたうとう御かくれになつたか。』から思ふと、何とも言はれない気がした。いろいろなことが胸と一緒にごたごたと集つて来た」、「私は黙然として立尽した。親しみの多い、なつかし味の多い、恐れ多いが、頼りにも力にもし申上げた私達の明治天皇は崩御された！」（685ページ）。

明治天皇の逝去は7月30日である。「その夏は雨の多い夏であつた。天

もまた悲むかとさへ思はれて、空には深い灰色の雲が封じ、雨が佗びしく軒の樋を伝つた。気候もいやに冷々した。洗濯した衣を干す日もなすやうなこともあつた。郊外から市街の方へ出て行く停車場までの路は、深い深い泥濘に埋められた。庭の水蓮の白い花に終日長く雨が降りかゝつた」(686~687ページ)、そしてその日は「暑い暑い七月下旬であつた」(685ページ)、と記している。

なお、多くの人々の心を震撼せしめた大逆事件についての言及はまったくない。

6 おわりに

1886(明治19)年再び上京したときは一家は牛込に居を定めたが、「その時分は、大通に馬車鉄道があるばかりで、交通が不便であつたため、私達は東京市中は何処でもてくてく歩かなければならなかつた。牛込の監獄署の裏から士官学校の前を通つて、市ヶ谷見附へ出て、九段の招魂社の中をぬけて神田の方へ出て行く路は、私は毎日のやうに通つた」(468ページ)、「私はかれと共に其時分の東京の市街を其処此処と言はずほうつき歩いた」(463ページ)、「私は其時分からかなりの健脚家で、東京のあちらこちらを地図を見い見いひとりで大抵は歩き尽した。高輪の泉岳寺、芝の公園、神明前、石川島、築地の居留地、東本願寺、さういふところをよく歩いた。殊に、漢詩と和歌とをやつてゐるので、近い名所一上野、浅草、向島などによく出懸けた」(470ページ)。このように、この東京の街を、そして郊外を歩いたことによる地域の観察があつてこそその東京の描写なのである。東京やその周辺の様子や変化が活き活きと記されているのは景観・風景だけではなく、風俗や人々の生活についてでもある。それはここで摘出したことだけでも明らかであろう。

まことに、『東京の三十年』は、明治の東京についての研究の重要な史料となるのであり、多様な関心、視点のもとに検討されるものとなるであろう。

Description of Tokyo in the Essay : “*Tokyo no 30 nen*”
(30 Years of Tokyo) by Katai Tayama

Haruki Kandatsu

The Essay “*Tokyo no 30 nen*” (30 years of Tokyo), written by Katai Tayama, is said to his recollections of the Literary World of Meiji-Taisho Era.

In this essay, Author Katai wrote not only his own process of growth as novel writer, but also appearances of streets of Tokyo, air of suburbs of Tokyo, and circumstances of the people.

The purpose of this paper is to grasp of changes of Tokyo during Meiji Era through analyse of this essay.